

中村俊定文庫
文庫 18
631





一
 年々子年々まゝおぼへて居るに
 何一人あゝ涙おちちるまゝ
 河い〜船おち揺り流さ〜世に
 あれ世のあゝをありまゝ武に
 せむ村居士い〜たつ程と甲〜門
 好い〜甲〜庚あも〜も終り終り
 いか〜う〜流〜久も松能下乃
 若くは平〜子〜美あるも終り



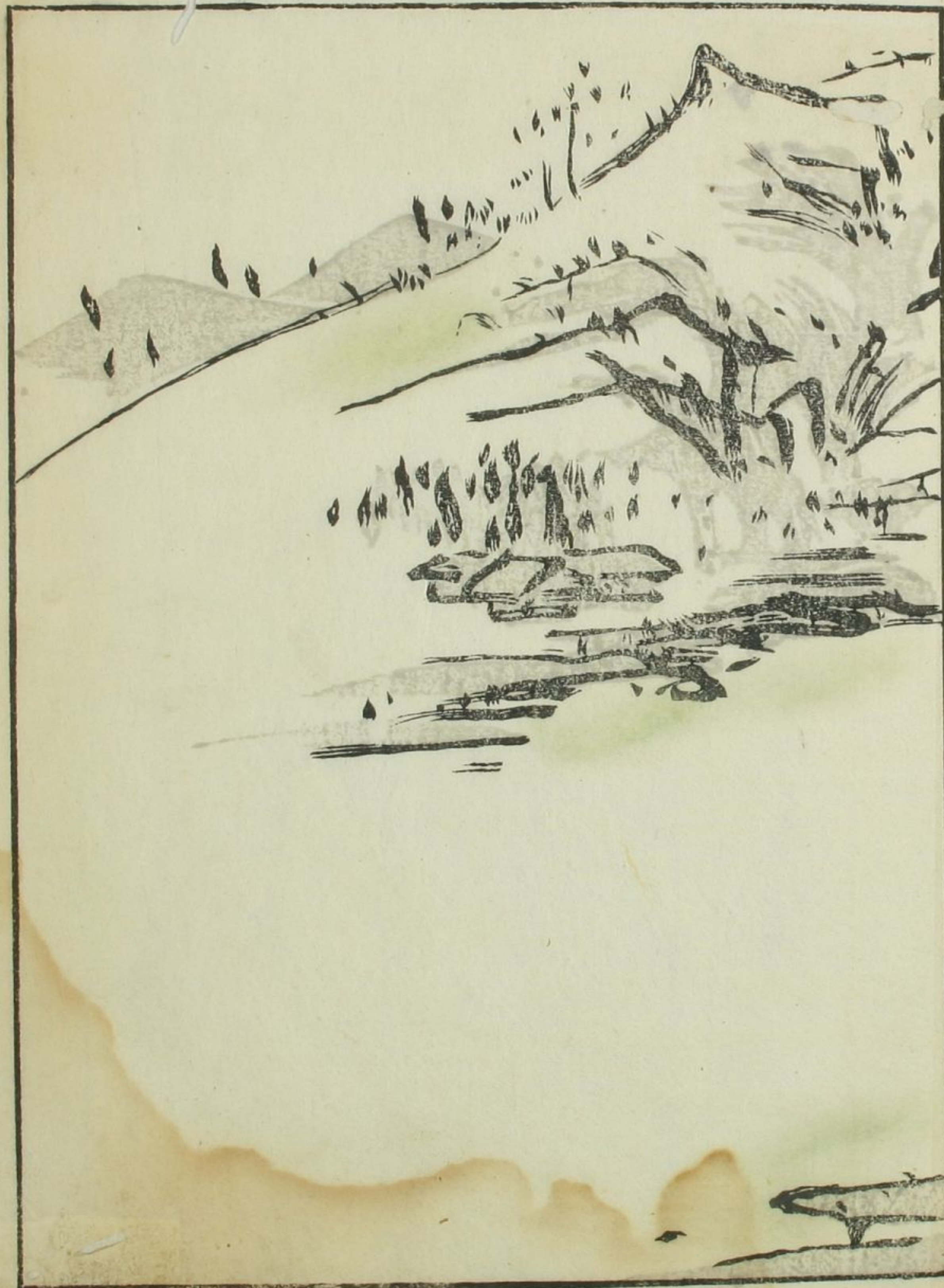
ほれきりいせふにちかひいふ
かきあぬいふはらへほのま
いふいふいふいふ大祥
及いぬせよいふいふいふ
いふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふ

平橋尾波水清題





丁亥年
月
日
画

我
山

湯豆磨粉幸いしや及能付

天明

余はの粘りし 孤るふ振子

素好

此季のうら女やあつるおしあはれ

深光

怖いあつるも講釈能取

実名

上着と洗つたききききき

帯呂

こころ痛むをこそ心を静む

幸魚

可くもさるるあはれは 雛子の聲

三枝

こころは大ききおのれは

米名

亭房もねる恋を裂けは

龜崎

まよふも 捜すねらねる

夏水

ふ散らぬ舟燈をきき

赤鳥

家鴨は行く流さし

燕山

孤遠も口南のうへへみりて

霍二

似るれぬ都を交る子福を

形石

十二座のしんを神系に終極し

素處

いつの代うへは松の枝

思泉

月影を暗げぬのうら船

其約

尾もぬる家を振返るる

山曉

流るるも連なり流らるる世の身

百敬

子東家け折の景火怖りぬ

急徑

亭桶うゝ雑を苔後とせりてきり

ふ谷

口もふうゝうにのつや朝日

古牛

かたかたほむまゝ山にもの氣

吾町

堂の中に法はさしき

藝芝

四季

走村居士遺章

春柳やおもひの跡をゆくは
 新や雀新の田のあはれ
 舟はれはれとてまはるあはれ
 来りしはもち花はやくたのしみ
 昌徳下りちるや 柳りし
 おもひをゆくは新のあはれ
 山棚にゆく人又来りしは
 舟はれはれとてまはるあはれ

春の田又輪をゆくは
 舟はれはれとてまはるあはれ
 来りしはもち花はやくたのしみ
 昌徳下りちるや 柳りし

春の田又輪をゆくは
 舟はれはれとてまはるあはれ
 来りしはもち花はやくたのしみ
 昌徳下りちるや 柳りし

研をこころいふ事候えりし
め時此の心も底をかく候し
又用を名とせしは深位のみ
海に流るる心もつらき心
秋の節の俗ありしは
よき時此の心もつらき心
心もつらき心人の心
心もつらき心人の心
心もつらき心人の心
心もつらき心人の心
心もつらき心人の心

心もつらき心人の心

心もつらき心人の心

研
研
研

心もつらき心人の心

長谷

心もつらき心人の心

漱石

心もつらき心人の心

暮山

心もつらき心人の心

望島

心もつらき心人の心

揚水

心もつらき心人の心

賣道

心もつらき心人の心

三平と云はれしをたすはたか
流るるをたすはたか
海にたすはたか
海にたすはたか
海にたすはたか
海にたすはたか
海にたすはたか
海にたすはたか
海にたすはたか
海にたすはたか

海にたすはたか

宗考

月七の夜に
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士

枕舟
記書

お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士

増尾
掃呂

お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士
お宿士

如蓮
杉
養水
巻

思那まらぬ君はくちの都はるるね

雪二

伊はね夕 深一 袖はるる

腰越 深を

ふのうう世は淋一 心や秋の暮

山曉

霧にちのほくま山は陰晴かた
此奥は碑ひねうつきはるるね
ねはもいふはるる入こねはるる
ねはもいふはるる入こねはるる
ねはもいふはるる入こねはるる
ねはもいふはるる入こねはるる

くくくくくくくくくくくく

金橋 花明

くくくくくくくくくくくく

龜峰

芳一 花名のくくくくくく

草魚

伊もあはははははははははは

百散

三師は棺を青糸はああ措一
まはくくく

寂一 心やえよよよよ 秋の山

鳥江

まはくくくくくくくくくく

安戸 三枝

情一 心やえよよよよ 塚は上

素母

言信る便も切れしつゝ子強

鼠白

供しき如き心しほきち社のきり

席岩

まはら共うし早く改より周忌と
あはて碑子あよまをよと好く

菊時まの心のほろけはまこつ後

米泉

河しき後よ向いよしよ水は鏡

中丘
東鳥

君あしき未結やせんさほきふも

小川
川卒

梅系はさしとさしとそむねの甲

風走

如きし後れ月そよ一七日

為梁

菊時世にわらひ草かへおは

呼身

菊しよ多人菊まもる菊は

柁里

菊しよる菊は菊は菊は

素哇

村君は菊をさすくはれたる菊は
菊は菊は菊は菊は菊は

菊時菊は菊は菊は菊は菊は

龔
思泉

村君は菊をさすくはれたる菊は
菊は菊は菊は菊は菊は

菊しよる菊は菊は菊は菊は

其釣

師のうゝの風は又奥せしれ
る最しと信くやうしな制
りれいひをせしれ情のこほ
る也
まをく芝蘭の園を遊ばし
る也
しれと終り其後をくす
まをく
まをく
も六の里ひを
る

秋の空のうらやまむらさき

のりくもふのりくもたぐく木槿の華

を九秋の空に先くすを分まら
耕を春のうらやまむらさき

秋の空のうらやまむらさき

松山
相今

赤木
山童

芝草

秋の空のうらやまむらさき
のりくもふのりくもたぐく木槿の華

二川
粹
左文

秋の空のうらやまむらさき
のりくもふのりくもたぐく木槿の華

脚
獨安
残花

秋の空のうらやまむらさき
のりくもふのりくもたぐく木槿の華

秩父大
未了

秋の空のうらやまむらさき
のりくもふのりくもたぐく木槿の華

聖
不識

秋の空のうらやまむらさき
のりくもふのりくもたぐく木槿の華

泉
流

悼辭

すあゝ〜改墓のの洞まあなほ
中よ心れをい〜寂なゆもむもの
難の〜あ〜〜〜〜〜
先村子のの時物よか〜一度ハ
を杖を〜り〜す〜再い破れて
終よ哀下れあ〜あ〜あ〜あ
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
淨きよ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
衆よ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
美門は〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
物〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
あ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
さ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

あ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ 抱〜ゆ

悠
柳
元

其〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ 油ゆゆゆ 顔かほゆゆ

喜
柳
元

年月の〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ 村雅作
昔〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
る〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ 早くゆゆ
お〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ 是に
他〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ 此大人ゆゆ

迹知之豈唯遇彼儼然端裝人
而後為知己乎余見村子遺文想
象其為人復觀鄉閭人所薰者
威儀甚敬也夫高貴富強之人雖
多矣當時則榮沒則已焉村子布
衣至今鄉人尊信之其二與文章
之觀者折中村子可謂至信矣嗚
呼惜哉余未見斯人詩云我聞其
聲不見其身遺愛我因作歌吊
哭之雨云

一代風流盡遺文抱道深
斯人不得見後者失知音
月水潑明珠青山落桂林
惜衰無限意猶想有謳吟

無碍庵

Handwritten text in the top-most row of the left page.

Handwritten text in the second row from the top of the left page.

海老野村



Handwritten text in the top-most row of the right page.

Handwritten text in the second row from the top of the right page.

Handwritten text in the third row from the top of the right page.

Handwritten text in the fourth row from the top of the right page.

Handwritten text in the fifth row from the top of the right page.

Handwritten text in the sixth row from the top of the right page.

Handwritten text in the bottom-most row of the right page.

〇 梅うまの湯の尾の目取

抱山 門意

しやうしやうしやうしやうしやうしやう

米珠

人初しやうしやうしやうしやうしやう

大菊

くしやうしやうしやうしやうしやう

未衣

はらぬもやしやうしやうしやうしやう

信宿

おぼろの流しやうしやうしやうしやう

雨柳

さうしやうしやうしやうしやうしやう

巴子

る舞おしやうしやうしやうしやう

河原市代尾連
管る

侍人もあしやうしやうしやうしやう

嵐二

佛もあしやうしやうしやうしやう

怪山

一聲もあしやうしやうしやうしやう

冬心

ゆきやあしやうしやうしやうしやう

雁浮

あしやうしやうしやうしやうしやう

文角

あしやうしやうしやうしやうしやう

くさ

浦也あしやうしやうしやうしやう

抑也

いふもあはれなるまじりて

あはれなるまじりて

半一月の松よあきこ

ほろろあはれなるまじりて

あはれなるまじりて

利あはれなるまじりて

越三谷

月桂

栲老

暖牛

吉又右

山田

秩父吉

文東

素桐

あはれなるまじりて

あはれなるまじりて

あはれなるまじりて

秩父右

山田

吉田

枝身

蝶

あはれなるまじりて

あはれなるまじりて

あはれなるまじりて

あはれなるまじりて

川越

栲老

履仁

一の糸

茶友

湛く水も 古き 龍舟の上の舟

白き月を 写さる 蟬舟の舟

舟のえぬ 松より 舟の舟

松舟 舟より 舟の舟

曉より 舟より 舟の舟

波の舟 舟より 舟の舟

舟の舟 舟より 舟の舟

舟の舟 舟より 舟の舟

舟の舟 舟より 舟の舟

舟の舟 舟より 舟の舟

舟の舟 舟より 舟の舟

舟の舟 舟より 舟の舟

舟の舟 舟より 舟の舟

舟の舟 舟より 舟の舟

舟の舟 舟より 舟の舟

新 龍舟

白 蟬舟

舟 舟

松 舟

舟 舟

舟 舟

舟 舟

舟 舟

舟 舟

舟 舟

舟 舟

舟 舟

舟 舟

舟 舟

舟 舟

舟 舟

舟 舟

舟 舟

相 十洲

浮 月

平 柯

出 石

甲 百 朵

仙 湖

雁 橋

鴉 橋

五 原

川 蝶

の芳ねしつら通るひまを

可弁さもよ〜やけや〜まこ龍

のたよ龍〜美人にあ〜んたりのま

のま〜おまよ〜雷〜静の龍

の雷〜の〜の〜の〜氷柱が

人の供人〜ま〜ら〜さ〜ら〜さ

流ぬや油豆鼓〜倍〜倍〜

峰山〜こ〜ま〜ま〜桜やまのま

世
江戸屋尾連
蓬列

菊尉

太砂

万里

雷歌

砂月

晴里

夜岡

のあまよ〜田〜の〜ま〜ま〜細代ま

のま〜ま〜園〜の〜の〜〜渡〜ま

まの海浪もま〜ま〜ま〜ま〜ま

のあや焼野を走る僧一人

の西直能流あ〜ま〜 里神系

の用カ〜の〜片〜は〜お〜〜文衣

のま〜僧〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま

のま〜ま〜田〜毎〜月〜能〜余〜波〜ま

世

牛腸

太阿

美魚

柳塘

二石

斗文

不石

九江

頂好湖ノ水ノ力ヲ反ル月

煮十

夕陽ノ影ニ入ル草ノ紅葉心

其羅

△[○]夢ニぬ人ニ如クニ

仙岩

一

武藏野ノ果を食むる白ヤシの峰

丹後
白兎

入るるや柳ノ水名所をさるる鞭

江戸
菅窺

持てる者ニ世やうんこを

泥尾

二羽のハダカをさるる人時を

西度

涼ノ水ノ如ク通る風岩

画蠅

夕陽ノ影ニ入ル草ノ紅葉心

扇和

其心を作るを待てる初鳥子

安戸
杉雨

吹掃ル杉風涼ノ暁の聲

其子郎

沖ノ水ノ叫ぶる音ノ如ク

放山

堀ノ水ノ如ク又流るる五月の

隣川

東ノ水ノ如ク聲ノ如ク流るる

青山
福川

系中や家よも〜〜〜中の解

小川

水枝

ほ〜〜〜〜〜の木

た就

衣さるゝ枯り 柳の巻

尋路

や〜〜〜海雲の尉

巴浦

物さるゝ白鳥もあゝもの哉

蒼跡

深〜〜〜も秋の〜

忠獲戸

蕪河

物影の輝〜〜〜ある

明上

摺駒

空〜〜〜目と枯ぬ十夜〜

江都連

川石

山細のお言 鈴や物あ〜

楚荏

七〜〜〜一〜〜鼻は 先

け川

と昔知〜大津に 御きおの川岸

一瓢

白帯や〜〜〜汚〜〜〜

園里

目利〜〜〜伯の夜さ〜

秀外

短冊や 柳味 鳴り せし せし

嵐二

武士も 肌を せし せし せし

李風

又 ありて 松の ちり ちり ちり ちり

友人 山 榮

花 家 入 ちり ちり ちり ちり

友人 時 雲

上 弱 水 舟 舟 舟 舟

招 難 舟 霜 後

舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟

追悼

中 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 珠

舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 天

舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 菊

舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 家

舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟

乙巳暮秋亮不幸遇先人之艱，築子立血淚
哀傷三年于茲已卒矣。先人朋友茂公語予
曰：村鄉少好學，尤嗜經術，又產業之餘，俸好涓
蓄之短咏，幾盡投子一椀。淵底惜哉！斯人而未
得其人，然得其志，則至矣。可謂愿慤之士者矣。
子今論選其雅訓者，以上梓時，予在縑經中進
退，狼狽，故不得敢為辭也。丁未季秋，已解衰徑，
會期功遠，近親族奠祥祭，以告喪終焉。偶吾

友來，又語予曰：今先人諸友吊哭之詩歌，幾
乎滿梁，乃鏤彼追悼章，又集先人橐中所藏
單辭數首，以貽諸于後。昆夫玉毀於櫃中，是誰
之過？興曰：然先君屬亮曰：吾自壯歲，欲與先聖
文章，不幸遂不能見其人，故為鄉俗所風化，
遂為幽賞風，皆之容，是豈大丈夫之所貴乎？以
故吾歿後，汝必勿使人見如此之言也矣。昔屈到
性嗜芟，臨死屬其妾曰：祭必以芟，而屈建及祥

集私情使不敢共何者不忍夫以私恩掩公
誼故也况亮受考父之嚴命言猶在耳而
如此則同於不孝曰然則刻之家塾則之考廟
使子孫思其心樂思其所嗜如何芟兄幸趣之
即并抱山敲冰二子序跋遂襄梓從事于此
是篇之成我豈謂為吾家之孝子抑不免為若
教氏之鼻人乎哉

亮維寧謹記

天明七歲次丁未季秋禫日



